

NEWSLETTER No.3

2011年7月発行

目次

比較民俗研究会の報告（104回～110回）	（1・2・3）
『比較民俗研究 25号』の発行	三村宜敬（4）
事務局よりお知らせ	高倉健一（4）

比較民俗研究会の報告（104回～110回）

第104回（2010年7月27日）

施愛東（中国社会科学院文学研究所副研究員、中国民俗学会副秘書長）

題目「ポスト鐘敬文時代の中国民俗学」

「中国民俗学の父」と呼ばれた鐘敬文が2002年に亡くなり、中国民俗学はポスト鐘敬文時代に入った。こうした鐘敬文没後の中国民俗学を振り返り、現在の学術的発展の策略、特に人材育成の問題を取り上げ、理論体系に乏しい中国民俗学は今後増大しつつある民俗学人材を如何なる方式で教育し、その学術質量を維持していくかについて具体的な事例を提示し、中国民俗学の今後の展望を述べた発表である。（報告 白莉莉）

第105回（2010年9月14日）

坂本 要（筑波学院大学教授）

題目「仏教民俗原論」

仏教民俗学の概論や研究対象については五来重がすでに提示しているが、何を原理として研究を進めるのかについては論じられていない。そのためには民俗とは何かということから明確にしなければならない。すでにメディア論からみた民俗の定義は「メディアと民俗」（『筑波学院大学紀要No.4』2009）で試みたが、以下のように民俗論・仏教論・仏教民俗論の全体を提示した。

- 一、民俗とは（1）メディアと民俗－非文字文化（2）脳の可塑性と記憶－非陳述記憶と外部記憶（3）民俗発見の歴史－折口信夫の「言語情調論」
- 二、仏教とは（1）仏教の歴史－仏教と民族宗教の習合過程（2）経典と修行－アタマの仏教・カラダの仏教（3）布教・勸進－寺院経済・廟産興学

三、仏教民俗とは (1) 仏教民俗研究史—戦前 (別紙参考) 戦後 (堀一郎・竹田聴州・五来重) (2) 原論—三円構造—仏教民俗の三角形 (教理・習俗・身体)

(3) 概論—五来重分類の組み直し

<参考> 「変態と風俗研究-日本民俗学前史-」『日本民俗の伝統と創造』1988 弘文堂 「日本的念仏の三円構造」『宗教民俗研究No.18』2008 宗教民俗研究会 (報告 坂本要)

第 106 回 (2010 年 11 月 22 日)

阮雲星 (中国・浙江大学教授)

題目「当代中国における「文化生態保護」の理念と実践 - 貴州「生態博物館」を手掛かりとして -」

中国貴州梭戛郷 (地方行政単位) ミャオ族の伝統文化を元に、中国・ノルウェー政府の文化協力項目として誕生した中国初の「生態博物館」の実態紹介を通して、当代中国における「文化生態保護」の理念と実践の原点について発表いただいた。現在中国では、国家文化策略における「文化生態保護区」の理念と実践において、文化遺産の生態保護 (eco-cultural preservation, holism) の思想が重要視される一方、もう一つの「文化生態論」(中国文化『生態』のアンバランスという言説) も存在する。その背景にある無形文化遺産保護「運動」には、「原点」へ戻る課題があるかと提示している。

(報告: 白莉莉)

第 107 回 (2010 年 12 月 13 日)

徐藝乙氏 (中国・南京大学教授)

題目「中国物質文化研究の現状と課題」

南京大学歴史学部の教授であり、国家非物質文化遺産 (無形文化財) 保護活動専門家委員会の委員や中国民間工芸美術委員会の副主任をも務める徐藝乙氏を招き、中国における物質文化 (有形文化) 研究の現状と課題について発表していただいた。徐氏によれば、中国の伝統的物質文化に対する研究は、その百余年の歴史のなかで重要な点を見逃してきた。それは、古いもの・中原のもの・漢族のもの・経済的価値の高いもの・皇帝や貴族のものばかりを重視し、近現代のもの・周辺のもの・少数民族のもの・経済的価値の低いもの・庶民のものを軽視しつつしてきたことによる。徐氏は、軽視されてきた後者のものを「民俗文物」と名づけ、それは「民衆の間で広く創造され、享受され、伝承されてきたもの」であり、これこそが中国の伝統的な物質文化の基礎となりつつしてきたものであると指摘する。

(報告: 藤川美代子)

第 108 回 (2011 年 12 月 13 日)

平井 芽阿里 (京都大学大学院グローバル COE 研究員)

題目「沖縄村落祭祀論再考 - 村落祭祀構造とウムクトゥの継承について -」

南西諸島の各地では村落祭祀の変容や衰退化が指摘されてきているが、発表者は村落祭祀の現状を民間信仰との関わりから考察したものである。宮古島諸島西原の村落祭祀は主にナナムイと呼ばれる神役組織によって行われる。発表者は西原の村落祭祀構造を長期にわたる詳細な調査から、日程、行う時間帯、内容、場所、供物、座順、担い手、役割などによって分類し、その上で神々に関する知恵である「ウムクトゥ」がいかにより保持され、継承されていくのかといった過程を、家や個人単位で行われる民間信仰の実践から明らかにしたものである。 (報告：古谷野洋子)

第 109 回 (2011 年 5 月 24 日)

広岡 裕児 (元アルペール・カーン博物館客員研究員)

題目 「庶民生活への目差し—アルペール・カーンの地球史料館—」

アルペール・カーン (1860~1940) は、世界平和はそれぞれの国や民族がお互いの生活を知りあうことから始まると考え、1898 年、旅を通じて異文化の発見を有為の学生たちに望み、「世界一周」という名の国際奨学金制度を設立した。また、1910 年から 1913 年には「地球資料館」を設立し、全世界およそ 50 ヶ国にカメラマンを派遣して、庶民生活の写真や映像を収集した。渋沢栄一・大隈重信らとの交友も知られている。今回は広岡裕児氏により残された貴重な映像の時代背景を読み解いていただいた。

(報告：白莉莉)

第 110 回 (2011 年 7 月 1 日)

サラゴワ (慶応義塾大学准訪問研究員)

題目 「内モンゴル・ホルチン地方のシャーマニズム - シャーマンへの道、イニシエーション、シャーマンの治療 -」

現在、内モンゴルのホルチン地方ではシャーマニズムが再活性化している。ブォ (ホルチン地方のシャーマンの総称) が急増し、ブォの治療を求めるクライアントも増加している。クライアントは主に 60 年代~70 年代に生まれた人々であり、その背景には中国の改革開放政策がある。具体的には医療費の高騰と社会問題を抱えた患者の急増であり、ブォは伝統文化に基づいた治療を行い、病因を外在化する。

また、シャーマンの成巫儀礼に多くの観客が集まり、モンゴルアイテンティティを確認する場ともなっている。発表者の撮影した成巫儀礼のビデオは息をのむような迫力であった。 (報告：古谷野洋子)

『比較民俗研究』第25号の発刊を迎えて

編集担当 三村宜敬

『比較民俗研究』は第25号の発刊という大きな節目を迎える事ができた。そして特集のテーマであるところの「祖先祭祀と仏教民俗」に国内外から多くの論文、研究・フィールドノートが寄せられた。編集担当者としても携われた事を嬉しく思う。

今後も比較民俗研究会は『比較民俗研究』の年1回の発刊を目指している。次刊の第26号は特集「シャーマニズム研究の新視角」と「ヒト・モノ・カネー現代市場民俗の一側面」である。現在、後進の方々が中心になり編集作業を行っている。

比較民俗研究 25号目次

巻頭言「仏教民俗学と祖先崇拝によせて」	藤井正雄
論文	
「モンゴルの民間信仰における女性禁忌への文化人類学的アプローチ」	娜仁格日勒
「“くそ”をめぐる韓日文化比較試論」	倉石美都
特集：祖先祭祀と仏教民俗	
「鎮魂」の近代」	坂本要
「仏誕節から見る韓国仏教民俗の伝承と断絶に関する問題」	片茂永
「京都地蔵盆の宗教史的研究－祖霊観解明の一手がかりとして－」	清水邦彦
「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容」	古谷野洋子
「現代韓国円仏教における「教団葬」の儀礼」	曹起虎
研究・フィールドノート	
「ラマ教寺院の年中行事」	根敦 阿斯尔
「念仏踊りの現状と継承」	大橋 克巳
「地蔵盆について」	近石 哲
“龍の眼” —資料と通信—	
「慶北大学校国際シンポジウム参加記」	曹 起虎

事務局よりお知らせ：「比較民俗研究会ホームページについて」

比較民俗研究会ホームページは研究会の発足から20年の節目に当たる2010年12月に開設しました。これまで開催した定例研究会や会誌『比較民俗研究』の紹介や昨年から発行を開始したニューズレターをPDFデータで掲載するなど、インターネットを利用して広く世界に向けた情報発信活動を進めるとともに、定例研究会での発表や会誌への投稿論文の募集もおこなっています。

HPアドレス <http://hikakuminzoku.web.fc2.com/>

編集・発行 比較民俗研究会幹事会（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科佐野研究室） 連絡先：hikakuminzoku@hotmail.co.jp

* 編集担当者 古谷野洋子・藤川美代子・白莉莉